**宗教改革５００周年〜信仰義認の今日的意義**

**〜分科会用補助テキスト〜**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　講師　橋本 昭夫

　ルターは、１４８３年１１月１０日、ドイツ中東部のアイスレ－ベンという町に生まれる。小事業家で鉱山事業で成功した父ハンス・ルーダー（Luder）、深い中世的信仰をもった母マルガレ－テの間に生まれた。よく１１日に、その日の聖人の名にちなんでマルティンと名付けられ受洗する。１４８４年５月、ルタ－家はマンスフエルトに移住している（この時の１４８５年ウルヒリ・ツヴイングリ－が生まれている）。彼は、１４８８年マンスフエルトのラテン語学校に入学し基礎教育を受けるようになる。父ハンスはマルティンが将来、法律家となることを望み、彼に高等教育の道を用意した。さらに彼は、マグデブルクのラテン語学校にと進んでいく。

　マグデブルクのラテン語学校在学中に「共同生活兄弟団」の冥想と活発な愛の活動の信仰の息吹に触れる。中世的信仰・敬虔の最上のものをルターはこの時期に吸収している。しかし中世的敬虔の底流としてあった審判者として神への責務と恐れが彼の内面に支配的であった。１５０１～１５０５、エルフルト大学に進んだルターは、人文的学問の修練、知識への飢えを強烈に感じ、快活の中に音楽に興じることのできる学生でありつつ、しかも内に真摯さと憂欝をたたえた青年であった。

１５０５年７月２日、マンスフェルトにいる両親を一時的に訪ねてエルフルトにもどる途中、エルフルトから６キロほど北の方にある村・シュトッテンハイムで落雷に遭遇し、これがルターを死の恐怖に陥れ、とっさに「聖アンナよ、助けてください、私は修道士になります」と修道院に入る誓願を立てる。これは父ハンスのよしとするところではなく、その反対を押しきり、また彼自身あの誓願がほんとうのものだったのか、と自らも内に疑いをもちつつも、その誓願にとどまり、２週間後の７月１７日に、ももっともきびしいアウグスティヌス隠修会・修道院に入る。上司に対する完全な服従のもと、やがて司祭となりさらに神学者となり、宗教改革者となっていく。

このルターの突然の決断の背景について以下のような状況説明がある：「父親によって裕福な家庭の娘との結婚が企てられており、それが恐らく学期中に通常、あり得ない帰省の理由であって。・・・さらに１５０５年にエルフルトで猛威をふるったペストは、特に強い印象により、人生の意味や救済をめぐる切迫した疑問にルターを対峙させたと思われる。その（落雷という）強烈な自然現象のさなかで神の超越的な力と出遭った体験によって、ルターは自分の命が無防備にさらされている状態であることを認識させられ、・・・恐れおののきを通して回心させられた。主なる神による、生死を分ける殲滅の一撃が彼を直撃しなかったことは、ルターの呼びかけを聞いたマリアの母である聖アンナによるとりなしでのおかげかも知れない。しかし誓いを果たすべきは力強くこれみよがしにルターの人生に介入してきた、罰する神に対してであった。・・・危機によって動揺した青年の内的素因ではなく、シュトッテンハイムで起きた外的体験でもなく、外的要因と内的要因とが響きあい、すなわち生命を脅かすような無力感の経験とその宗教的な解釈との共鳴のみが、（ルターにとって）この体験を生涯における一つの転換点とさした」（『ルター　異端から改革者へ』T.カウフマン、教文館、２０１０年）

　中世から、救いを真摯に求める魂にとって、修道士になる道が決して特異なものではなく、教会はその当初より神への確かな道を望む者にこの道を勧告していた（「福音的勧告」と呼ばれる）。彼は教会の、そして修道院が提示する救いの道（苦行、断食、徹夜の祈祷、巡礼など、およそ救いに貢献する「功績」と目されるわざ）を、額面通り、徹底して歩もうとした。しかし神の要求を満たそうとするルターの懸命の努力にもかかわらず、彼の心には救いの確信はいささかも与えられず、むしろ神のさばきのみが強烈に彼の心に切迫するのみであった。修道院の上司で隠修会総長であったヨハン・フォン・シュタウピッツは、彼の魂の慰め手となり、さらに彼の修道士の資質と才能を認め、彼を自分の代理者とするまでに用い、さらに彼を新しく創設されたヴィッテンベルグ大学（１５２０年創設）の教授に推挙し、一度はエルフルトに戻るものの、１５１２年に再び同大学での働きについている。

　その間、彼は、１５１０年には、ローマを訪れが、「永遠の都」の霊的・道徳的頽落に深い懸念を覚える。特に高位聖職者の華美な生活に深い疑義を覚える。後年、教皇および聖職者階級を「反キリスト」と呼ぶまでに攻撃するようになるが、その伏線がこの時の経験があったと言われる。

のち彼は、宗教改革者・神学者として彼は独自な道を辿る。ノミナリズムと呼ばれる哲学的伝統（とくに神のご意志の圧倒的であるという神理解や個々のもの・個々の人の重要性などを強調する立場）の中で学びつつ、彼は聖アウグスティヌス（３５４～４３０）の「恩恵の神学」に触れるに至り、さらにスコラ神学の形式主義的神学から「聖書のみ」真理であるというそのような道を見出している。大学でのルターの働きは、聖書釈義に集中していた。「恩恵博士」と言われたアウグスティヌスの神学への傾倒は（彼のみならず）ヴィッテンベルク大学全体のものとなり、その恩恵論が深い影響を及ぼした。激しい霊的な「戦い」（アンフェヒツング＝Anfechtung［試練、誘惑、攻撃］）を経験しつつ、福音の再発見に向けて、彼の信仰的認識は深められ確かなものとなっていった。

ルターはこの間、１５１５〜１６年の頃、ローマ書に取り組む中で宗教改革の根源となる「神の義」の福音的意義を「発見」している（「塔の体験」）。これについては、以下の別項目であらためて学ぶ。

　あらたな神の義の発見をもとに、１５１７年１０月３１日、全聖徒の日の宵、「９５ヶ条の提題」（「贖宥の効力を明らかにするための討論」）をスコラ神学の形式にのっとって、ヴィッテンベルグの城教会の扉に掲示、贖宥の問題について、もっぱら学問的に討議しようという提案であった。しかし「提題」は、ラテン語で書かれていたが、ほどなくドイツ語に訳され、プリントとされ、リプリントされ、燎原の火のように、ドイツ全土に驚くべき速度で伝わっていった。ルターは、その純粋に学問的な性格であるにもかかわらず、この提題をもってはからずも時の必要に答えたと解される。宗教改革が大きな運動となっていった背景には、政治的、民族的、文化史的動機がさまざまに働いていたであろうが、ルターが提題を掲示したときの意図は、純粋に信仰的な事柄であった。ルターは、この「提題についての説教」を翌年にドイツ語で書いているが、２２の版を重ねるまでに広がっていったと言われれている。この頃からLuder からEleutherius（というギリシャ語・ラテン語の合成による名で、照らされた者の意）の名を採用し、この頃からその短縮形であるLutherを名乗るようになる。

ルターはこの提題の提示によって宗教改革とよばれるに至る大きな歴史的運動が起こるとは考えなかったが（彼は教皇およびマインツの大司教アルブレヒトがみずからの神学的立場を擁護してくれるに違いないと当初信じていた）、その提題の神学的はカトリック信仰の中心部、それをもって教会が人々の心を支配していた告解の礼典の根幹をゆるがせにするものであった。しかし、ルターが問題にした「贖宥券」の販売を画策したのはアルブレヒトであり、それを承認・許可したのは教皇レオ十世であることを知らなかった。

その翌年、彼は、所属する隠修会の総会で「ハイデルベルグ提題」と呼ばれる文書を公にする機会にめぐまれ、そこにおいて彼自身の神学、「十字架の神学」を論じている。おそらく、彼のこの神学（つまり信仰的確信のことであるが）の核となる部分は確立していると推測されている。「十字架の神学」とは、キリストの十字架の苦難のしるしに、人間のこの現実の一切の重圧――不条理、矛盾、虚無、苦難――に抗してなお「神を神とする」信仰が揺るがず与えられると洞察したからであった、逆相とすべての人間的期待の対極にこそ神の恩恵が見出されると彼は認識するに至ったのである。

ルターはか「９５ケ条の提題」によって異端尋問の対象となり、枢機卿カヤタンとの討論により異端的と判断され、ローマに喚問されるはずであったが、フリードリッヒ賢候の主張によって彼はドイツで審問される運びとなる。１５１５年頃までには、彼の神学の核となる部分は確立している、そしてそれを彼は「十字架の神学」と呼ぶようになる、なぜならキリストの十字架のもとにおいてのみ、現実の一切の重圧―不条理、矛盾、虚無、苦難―に抗してなお神を神として経験する信仰の可能性があると洞察したからであった、逆相とすべての人間的期待の対極にこそ神の恩恵が見出されると彼は認識するに至った。

　１５１８年、メランヒトンがヴィッテンベルグ大学の若き教授として就任し、終生、ルターの同労者となる。この時と前後して、さらにインゴルスタットという町の大学の教授であったエックとの「ライプテイッヒ討論」において、彼は、討論の中で、教皇の無謬性も「（枢機卿は高位聖職者たちよりなる）公会議」の無謬性も否定するにいたり、さらに異端の嫌疑が深まる。ルターは、これらを通して、聖書のみが真理に至る道であり、しかもその道はすべての信徒に開かれているとした。ここにいわゆる「万民祭司」の思想の原点である。

１５２０年、彼の「信仰のみによって義とされる（神のみ前に義なる者として立たせていただける）」という「信仰義認」は、人の道徳を破壊するという嫌疑・攻撃に対し『善きわざについての説教』を、教会の改革に責任ある信徒も参与すべきであるとの促しの書『ドイツ貴族に与える書』を、教会における礼典（サクラメント）の誤用を指摘し本来のものに戻す書として『教会のバビロン捕囚』を公にしている。そして彼の宗教改革的著作の代表とも言うべき『キリスト者の自由』を、この年にものにしている（１５１７年から２０年までの間に彼のドイツ語の著作だけでも、当時としては信じられないほどの２５万部を売ったと伝えられている（ルターは、活版印刷と言う当時としては最新のメディアを駆使したが、彼の活動の拠点であったヴッテンベルクは、今日的表現を用いれば、さしずめ当時の「シリコン・バレー」であったろう）。

　１５２０年のクリスマス直前、教皇はルターに対して「破門脅迫教書」を発したが、ルターはそれと教会法を焼き捨てた。それにより彼はローマ教会を自分が破門すると言うことを意識していた。さらに１５２１年４月１７～１８日、彼はヴォルムスの国会に召喚されそこでかの有名な「われここに立つ」の証言をしている（「皇帝陛下と殿下方は、わたくしに簡単で明瞭で正確な答えを要求しておられますので、ここにお答えいたします。それは次の通りであります。わたくしはわたくしの信仰を、法王にも会議にも従わせることはできません。と申しますのは、両者ともしばしば誤りを犯し、また互いに矛盾してきたということが明白だからであります。それゆえ、わたくしは聖書からの証明、あるいは明瞭な議論によって、納得させられない限り、また、わたくしが引用した聖句によって納得させられない限り、そして、このようにして、わたくしの良心が神のみ言葉によって義務づけられない限り、わたくしは取り消すことができませんし、取り消そうとも思いません。なぜなら、キリスト者が良心に背いて語ることは、危険だからであります。ここにわたくしは立ちます。わたくしは、これ以外に何もできません。神よ、わたくしを助けたまえ、アーメン」）。これによってルターが異端者であることが決定し、「アハト刑」（帝国追放刑）に処せられることになった。

ここに至って、彼の領主フリードリッヒ賢侯はルターをもはや合法的には保護できぬことを察し、国会終了後の帰途、彼を拉致し匿う策に出る。拉致先はヴァルトブルク城であった（ここでの幽閉の間、彼は新約聖書の翻訳を１１週間で完成する、そして１５３４年の旧約の完成と合わせて、ドイツ語圏はもとより、周辺諸国にも「ルター聖書」として大きな言語的文化的影響を及ぼすモニュメントを打ち立てる）。その間、大学の同僚であったカールシュタットがヴィッテンベルグで急激な改革運動に乗りだし市を混乱に陥れていたことを知ったルターは、急遽、賢侯の禁止をもかえりみず、市に戻る（彼がその際に認めた書簡の一説：「最も強い信仰を持つものこそ、最も強力な保護者である」と言い、賢侯がルターを守護するのではなく逆にルターが賢侯を守るとの確信の表明した）。彼はそののち福音的教会の礼拝の式文を作成、ミサの根本的改革を実施、しかし彼はこの間も新しい教会の組織の形成を試みたわけではなかった、彼の終始一貫した姿勢は新しい教会の設立ではなく、古い「母なる」教会の再建であったゆえに。

　１５２５年、ミュンツアーに率いられての農民蜂起が、社会的および宗教的要求が重なりあい、革命運動に展開、ルターのいわば「政教分離」の原則が試練にさらされる。農民の要求の妥当性を認めるものの、キリストの名において蜂起を起こすことに反対する、彼の体をはっての調停工作も奏効せず、結局、領主たちに武力の行使を要求し（ルターの目に暴徒と映った農民に対し、彼は領主たちに「農民を刺し殺せ、絞め殺せ」と書いて、鎮圧を促した）、農民蜂起は１０万人とも１５万人とも言われる農民が殺害されるという悲惨な結果に終わる、ルターは勝利者の領主たちに自制を要求したが、この時から、ルターがその「人気」を大きく失っていくことになる。

農民蜂起の年、１５２６年６月、ルターはかつて修道女であったカタリナ・フォン・ボラと結婚、ルターは４２歳、カタリナは２６歳のときである。この結婚は、必ずしも同僚から祝福されるようなものではなかった。メランヒトンは「淫らである」と批判し、結婚式に出席することを拒んだ。しかしルターは、独身生活がかならずしも聖ではなく、ふつうの人の生活こそ福音にかなったものであると確信して結婚に踏み切った。ある意味では、それはロマンティックなものではなく、むしろ福音信仰の証しであったのである。二人の間には、男女３人ずつ、しかし娘二人は、早世している。とくに１３歳でなくなったマグダレーナの失ったときの悲しみの深さが伝えられている（「レーナ、お前は主のもとで今は幸せなのに、私はどうしてこんな悲しいのだろう」）。カタリナは、宗教改革者としてのルターの最良の協力者となった。

　話は前後するが、農民蜂起の前年（１５２４年）、時の随一の人文学者エラスムスは、自由意志をめぐってルターと神学的討論を開始（ハイテルベルグ提題においてルターは「自由意志とは空虚な概念である」と主張している）、ルターそれに対して１５２５年彼自身の評価による最上の著作「奴隷意志論」を著わす、それは宗教改革的福音理解と近代的合理主義の間の論議のさきがけ的性格をもつものである（ルターの彼の深遠な神経験がこの書に雄弁に反映、神はこの世の現実の背後にあってすべてを働く圧倒的存在である、その美しさも、その恐ろしさもすべてを包括する圧倒的存在であり、人間の理性でそのリアリティを計測することは不可能、この窮めがたい現実の中から神はそのとてつもない恵みを示し給う、十字架上の御子がその現われである、「その信仰はこの世の現実の謎を解きはしない、しかし合理的にそれを解決しさろうとせず、その現実を勇敢に担っていくことを得させる」）。この時にルターはいわゆる人文主義者と袂を分かつことになる。同時にいわゆる「天来の予言者たち」の代表する心霊的福音理解とも明確な一線を画するようになる。次第に福音教会の組織が必要であると自覚され、礼拝式文、賛美歌、教理問答書などが整えられていく。

　この間、ルターは、講義、説教、聖書翻訳など途切れることなく改革者としての働きを継続、しかもスイスの改革者たちと聖餐をめぐって論議を重ねる（ルターはカトリックの無血犠牲の反復およぎ化体説を排撃したけれども、聖餐における受肉のキリストの現在をみじんも疑わなかった、人間の理性を越えたキリストの受肉の秘儀に固執し、その単純な聖餐の設定の言葉に信頼をよせたのである、そしてその背後に人間の知恵では測りがたい神の不思議への感覚がある、神はすべてのことの中にいます方であり、聖餐において、具体的なエレメントのもとに神は具体的に人間に恵みをもって望みたもうという確信なのである）。

　ルターは、霊的領域と政治的領域（福音が支配するところと律法が支配するところ）とを峻別したけれども、そのことはこの世の現実に無関心であったということではない、１５２９年、トルコ軍はウイーンの門口まで攻略、皇帝に協力しトルコ軍に向かうよう奨励（「皇帝の命令のもと、彼の名によって、その旗印のもと」と言っている）。フランスおよび教皇との紛争にけりをつけたカール５世は帝国の力を結集してトルコの勢力に対抗しようとする、そのために宗教問題の調停が必須と判断し、１５３０年にアウグスブルグに国会を招集、福音派の信仰告白の古典的表現となる「アウグスブルグ信仰告白書」が皇帝の前で読まれる、ルターはその間（４月から１０月まで）コーブルグに、とどまり国会の進展の様子を見守る、手紙などで指導し励ます。国会の結果は、プロテスタント諸侯にとってその存在そのものに関わるものとなった、彼らはその共通の防衛協定を締結、シュマルカルド連盟となる。１５３０年から１５３７年まで比較的平穏な年でありルターの晩年の成熟期といえよう。またルターの晩年は、往々にしてルターのキャリアの中で反動的な時期と評価されるが、それもやはり彼の神学的確信、そして中世の思想的背景を十分考慮にいれて判断されねばならない事柄である。

１５３０年から逝去の１５４６年は、ルターにとって比較的平穏な年であり、彼本来の神学者・説教者としての活動の円熟期であったといえよう。１５３５年から逝去の直前まで、１０年間にわたり、創世記を講じている。これは大冊のワイマール版・３巻におよび、その英訳版は１０巻にもなろうとするものである。

晩年のルターは、往々にしてルターの改革者としての歩みの中で反動的な時期と評価されるが（とくに露骨な反ユダヤ的言論など）、それもやはり彼の神学的確信、そして中世の思想的背景を十分考慮にいれて、歴史的に判断されねばならない事柄である。しかし忘れてはならないのは、マルティン・ルターも、たとえ彼がどんなに評価されようとも、多くの制限と限界のもとにあった一人の信仰者であったことを忘れてはならないであろう。彼の臨終のときの言葉は、「われわれは乞食である、これはまことだ」であった。彼は、ただ神からすべてをいただく乞食であるということを深く自覚していたということである。「キリスト者であるということは、福音を心に抱き、キリストを信仰することだ。だが信仰は、我々が関与したり協力することなしに、言葉をとおして働く聖霊によってのみもたらされる。それは神ご自身のみわざなのである・・・」。

**信仰義認の背後にある「神の義」の再発見**

　ルターの根本的な問いは、「わたしはどうすれば恵み深い神を獲得することができるか」であった。しかし彼は修道によっては、自己を求める自分を克服できず、またそのことの助けとなるとされた教会の秘跡も助けにならなかった。秘跡の高価には、「真実の」悔い改めが条件として付随しているからである。また、神秘主義も、彼自身の貧しい自我と生ける神との深淵は、そのいかなる技術をもってしても、埋めることができなかった。さらに、彼が大学で学んでいた「自己の最善を尽くす」（facere quod in se est）者を神はあわれみ救われるという教えも助けにはならなかった。それというのも、救済の基準はつまるところ人間の側にあって、神の絶対的な要求の前に立ち得ないものであったからである。「主よ、あなたがもろもろの罪に目をとめられるならば誰がたちうるでしょう」（詩篇１０３：５）という詩篇の言葉どおりの経験である。

　そんな霊的苦闘の中、とりわけルターの心をとらえてやまなかったのは、ローマ書で彼が出会った「神の義」（「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」）という言葉であった。これは、人が神の前で義とされるということ、神の前で「よし」とされるということをめぐって重要な事柄であった。彼は当初、伝統的解釈から、この「神の義」とは、「各人が神からその受けるべき分を受ける」という意味、つまりそれは人間を「よし」とする・しないを決める神の審判基準であるとルターは理解していたのである。しかし、彼はこの「神の義」ということばを日夜思いめぐらすなかで、それがついに福音の再発見にとつながり「神の義」の真意を知るにいたるのである――

「私は、あの『神の義』という言葉を憎んでいた。それをすべての学者の用法に従い哲学的な意味で理解するように教えられていた。すなわち、それによって神が義であり、また、神が罪人と不義な者とを罰したもうところの能動的義と理解するように教えられていた」。したがって、彼は「神の義」という言葉からは怒りと罰以外になにも考えられなかった。しかし彼は、ローマ１：１７の「神の義」という用語の不思議な意味にとらえられていて、日夜それに思いを注いだ、神の義は人間を滅ぼすことを意味しないであろうか、もしそうならどうして「神の義」は福音となることができるであろう。しかしこのとき彼の考えに大きな転換が生じた、「このとき、はじめて私は神のあわれみを理解し始めた。ここで『神の義』と言う言葉で信仰者が、それを受け取ることによって生きることのできる義であるが理解されたのである。そしてあの文章の意味は福音の中に神の義が啓示されたということであった。すなわち無価値なものを信仰によって義とするという受動的な義が啓示されたのである」、これこそがルターの福音の再発見であった。人間は神により義とされる、神の義は人間に与えられる義である、すなわち、ただ恵みにより、信仰により、キリストのゆえに神の前に義とされるという義であった。そしてそこに示されたのは、ご自身のものをその被造物である人間に惜しみなく与えて救われる神の姿であった。

この発見はテキストを厳密に学問的に考察することによって得られた冷静な言語学的結論であった。「神の義」の福音的意味を知ったときのことを、ルターは次のように思い返している：「そのとき私は自分が完全に新しく生まれ変わり、開かれた門を通って天国に入ったことを感じた。それ以後、わたしは聖書全体をちがった目で見るようになった」。そして、ルターはこの救いの経験は神からのものであると確信して疑わなかった、正しい神学はまさに神からの贈り物であると理解したのである（「わたしはロ－マ人への手紙のパウロを是非とも理解したいと熱望していた。それまでにわたしの理解を妨げていたのは、熱意の不足ではなく、第一章のたった一句『神の義は福音の内に啓示される』であった。というのは、『神の義』ということばを私は憎んでいたからである。私は全ての博士たちの習慣と解釈に則って、この言葉を哲学的に、いわゆる形式的または積極的な義、すなわち、この義によって神は正しいのであり、それ故に罪人と不義なる者が罰せられるところの義であると理解するように教えられてきた。しかし私は、自分がどんなに非の打ち所のない修道生活をしても、神の前では良心の咎を持つ罪人であり、私の十分な善業によってもこの罪を償えるとは思えないと感じていた。だから、私は罪を罰する正義の神を愛せず、憎んでいたのである。私はそういう神に愕然として、冒涜ではないにしても、やはり恐るべきことをつぶやいた。すなわち原罪によって永遠に呪われた哀れな罪人は、すでに十戒によってあらゆる不幸を背負わされているのに、それでもまだ足りず、神はさらに福音を通して苦しみの上になお新しい苦しみを追加し、福音を通して神の正義と怒りを我々に科すのか。このように良心はちぢに乱れて、気も狂わんばかりであった。この失意の最中でも私は、聖パウロが言ったことの意味をどうしても知りたいと願って、ロ－マ人への手紙のあの箇所を問い続けた。こうして昼も夜も考え続けた末に、ついに私は神のあわれみによって次の箇所との関連に気づいたのである。『神の義は、「義人は信仰によって生きる」と記されているとおりである』。そこで私は『神の義』とはこれによって義人が神の恵みにより『義人として』生きる、すなわち、信仰によって生きるところの義であると理解し始めた。そしてこの箇所は福音書を通して神の義が現われ、この義によってあわれみ深い神は、義人は信仰によって生きると書き記されている通りに、信仰によって我々を義とするという意味であると、私は理解した。その時、私は、私が本当に新たに生まれ、開かれた門を通って天国へ入ったように感じた。直ちに私の目には聖書全体が新しい光を帯びて立ち現われた」１４５３年ラテン語版著集の序言）。

**宗教改革――教理の改革**

　宗教改革はこの「神の義」（ラテン語で言えば iustitia Dei）の意味の再発見によって世界史的な運動となったものである。むろんそのように運動が推移したことについては、すでに述べたように、複雑多岐にわたる歴史的背景のあったことは言うまでもない。直接のきっかけとなった、テッツエルという修道士の贖宥券販売の背景には、当時の教会の信仰的・倫理的状況があり、ローマ教皇庁の財政的な思惑があり、枢機卿アルブレヒトの俗的な野心があり、それに関わって金を動かす金融業者あり、さらに言えば、それらの形をとおしてのローマによるドイツに対する長年にわたる収奪があった。とりわけ教皇庁の世俗化とそこからくる政治的・財政的施策の理不尽さが長く多くの人の黙視するところではなかったのである。ルターの宗教改革は、歴史的運動としては、政治的、経済的、社会的なさまざまな勢力の結集の結果でもあった。その意味では、どのような要素が、どうかみあってあのような歴史的展開になったのかということをその経緯をたどることは、興味のつきぬところである。歴史には必然という大きな流れに偶然というちいさな契機のからまりあいがあって、その不思議を思わせられる。

　宗教改革がなぜ福音の再発見と言われるのか、つまり福音がそれまで覆われていたのが、マルティン・ルターという一人の修道士の魂の苦闘をとおして再び見いだされたというのであるが、それは実際にはどういうことであったのであろうか。すでに述べたようにルターの問題の究極は「わたしはどうすれば恵み深い神を獲得することができるか」であった。換言すれば、救いの確信の問題である。そしてその前提となっている人間の実存状況の理解は、救いを確信できない不安そのものである。すでに述べたように、中世においては、救いを獲得する最短・確実の道は修道士になることであった。そしてルターは、彼のおそらくはそれまでに遭遇した種々の事件の経験から、早晩、自分の救いのために何らかの具体的行動をとらねばならぬ内面的な必然性を感じていたであろう。そのときに雷鳴に打たれて修道士になったのであるが、もっとも厳しいとされた修道会に入会してからというもの、後年、その厳しい修業ゆえの後遺症により健康面で苦しまねばならなかったほどに、救いの確かさを求めて難行を求め苦行に励んだ。しかしそれでもなお、救いのために必要とされた神への純粋な愛に到達できないことをますます知るばかりであった。「洗えば洗うほど汚くなる」と言った意味の経験をしたのである。そして、後年の述懐であるが、「もし人が修道によって救いを得ることができるとすれば、私はいの一番に救いを得ることができたであろう」と自負できるほどであった。

しかし修道によっては、人は救いを確信することができない。そして現に、ローマ・カトリック教会では、救いを確信することは、今も否定されている（トリエント会議の決議によってそれはアナテマとなっている）。人は、神のあわれみを望みつつ「おそれとおののき」をもって自分の救いの達成につとめなければならないとされる。しかしルターは、そこにとどまることができなかった。彼と同じように修道士となって救いの達成を努めていた多くのともがらがいたであろう。彼らは、おのれの救いについてルターほど先鋭な不安の感覚をもっていなかったと言えよう。だから、ルターのような過敏と思える不安感覚は、異常と見えたのであろう。それを逆に言えば、ルターは神の聖なることの現実を他の誰よりも鋭敏に感じていたということになる。しかし「神の義」というこの言葉が福音そのものであるとの発見によって、福音はその律法的歪曲から解放され、天の門をひらく救いの言葉となったのである。

**宗教改革５００周年の祝いの意義は**

　私たちはこの年、なにを「記念」、つまり「念いに記す」のであろうか。ルターに始まった宗教改革の遺産はなんであるのか、私たちはこの年、深く思いをめぐらす。それは何よりも「福音」を文字通り「福いな音づれ」である。創造者にして父なる神が、み子を私たちの罪のつぐないのために十字架に送り、み子のまったき義を、私たちの義としてくださったという喜びのメッセージである（「キリストの義が私のものとなり、私の罪がキリストのものとなった」と言いこれを「幸いな交換」と呼んだ）。私たちは、み子における神のご愛に打たれ、ただ頼り信じることによって神のみ前に「よし」とされる。信仰義認とは、まさにそのことを約めて言ったものである。

　しかしこのことはルターの時代、けっして明らかでなかった。そうではなく、主なる神の前で「よし」とされるためには、私たちは、私たち自身のありようや、なにをなしているかが問われた。救いのためには、私たちはなにものかでなければならなかった。しかし私たちの現実のどこに、聖なる神のみ前に主張できるなにかがあるのであろうか。「主よ、あなたがもしもろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができるでしょうか」とすでに上述で見たとおりである。しかし私たちは、主イエス・キリストにあって「ゆるしが備えられているので」み前にたつことのできることを、信仰の確信として与えられている。

　ルターは神の創造のわざを論じて、その一つ一つが、あまりにもふつうのことであるかのように起こるので、その不思議への感動の感覚がマヒしてしまっているという意味のことを、しばしば言っている。それとまったく同じことが、信仰によって義とされているということも、いつの間にか「当たり前」となり、そこに驚きも感動も失い、福音が与えるはずの慰め、励まし、希望を失ってしまっているということではないかということである。この年、この宗教改革５００周年のとき、「わたしたちのために、罪を知らない方を罪とされ・・・わたしたちを彼にあって義となる」（Ⅱコリント５：２１）ようにしてくださったことを、日々、思いあらたに心に刻むことである。「わが魂よ、そのすべての恵みを心にとめよ」そして「主をほめる」ことである。

キリストの十字架と復活の勝利から、「罪と死と悪魔」から自由にされている。主イエスにあって、それらはすべて最後の力を失っている。「わがやぐら」である神がともにいてくださる（インマヌエル！）との約束が私たちを恐れから自由にする。さらに具体的には、私たちは自分への「こだわり」そしてその「悩み」から解放される、自分への拘泥から解放される。神が「よし」としてくださるとき、私たちはもはや自分を「よし」としなければならない強迫から解放される。神が、この「私を私のままでよし」としてくださっているからである。

　そしてこのように神に、私のすべてを引き受けていただいたので、私の心は自分にではなく、わたしの「となりの人」に向いていく。神の恵みによって自由にされているとは、「となりの人」へと自由にされているということである。「自分を喜ばせることを是とされなかった」（ローマ１５：３参照）主イエス・キリストに似る者にしていただくということである。キリスト者は、「信仰義認」と言い表される福音により、主イエス・キリストにおけるまったき恵みゆえに、自由にされたものである。「どんな被造物もキリストにおける神の愛から私たちを離すことはできない」（ローマ８：３９）という確信の与える自由である。かそしてその自由は、自分をなんとか価値あらしめようとする不毛な自己拘泥から解放された自由であり、それは「となりの人」に奉仕する自由である。ルターは、すでに触れた１５２０年の著作『キリスト者の自由』の冒頭でつぎのように言っている――

　　キリスト者は、すべてのものの上に立つ自由な君主であって、

なに人にも従属しない。

　　キリスト者は、すべてのものに奉仕する僕であって

　　　なに人に従属する。

　「わたしは死ぬことなく生きながらえて主のみわざを語り伝えよう」（詩篇１１８：１７）はルターの愛唱の詩篇の句であった。ルターは、５００年を経てなお語り続けている。それは、ルターその人ではなく、ルターを一人の信仰者として歴史の只中で召し、その驚くべき恵みのみわざを彼に示された「めぐみ溢れる」神ご自身が、み言葉をとおし、彼の証しを通して語っておられるのである。それゆえにこそ、「福音」、信仰のみよる救いのよき知らせはつねに新しい神からのメッセージなのである。